

空



2010年
SORA 29号

吾亦紅 (29) | 2

柴田 佐知子

大空を見ず青空に大根干す

許す気はなしと寒波の来りけり

全長を神に捧げて瀧凍る

凍瀧に祝詞の声の上りゆく

北国を灯してゐたる冬林檎

冬眠の山ふつくらとしてゐたり

初夢や木星の縞匙ですくひ

絵屏風の剛の岩山二つ折り

臍の緒は行方知れずや冬三日月

寒の水引つ張つて鯉沈みゆく

手毬唄

柴田志津子

朝顔や譲る気のなき厨ごと

狐畏かけて眠りの浅かりし

結界に剛の一竿寒波来る

十方の神の名あつめ手毬唄

白妙に墨痕をどる筆はじめ

子の名前ならべて包むお年玉

寒鰯を捌き頭をもてあます

降る雪や絵筆こまごま人形師

寒鯉

小林朱夏

咳き込むと狭くなりたる己が部屋

雪女郎見たかのごとく詠まれけり

泥の中より寒鯉の出てきたる

手袋の効き指の先破れけり

風邪の子が人形の世話やいてをり

手を入れて袖口遠し母の夜具

大寒や鳥鋭角に現るる

土筆摘む独りに時を告ぐる鐘

鶴守

松田明子

山火

秋千晴

青空を揺らして鶴の来りけり

凍蝶を囲みて声を低くせり

雲割りて鶴ゆつくりと降りて来し

年の市するめの足の長々と

先達の鶴来て村の整へり

牛小屋も除夜の鐘待つばかりなり

鶴の来て鶴守の日々始まりぬ

鏡餅割るに女の底力

先達の鶴大空をほしいまま

逃げ回る子に獅子舞のうねりたる

梟の鳴いて闇夜を深めゆく

節分や肩巾ほどの鬼の面

茶を点てて討入りの日と思ひけり

消防車山火に染まり待機せり

十二月鉢に植ゑきし赤き花

薄氷をつついて鳥のうす緑

存問

安武 晨子

煤逃げ

あさなが捷

大海は知らず八十路の年を越す

紅入れて祭の顔となりにけり

消息は賀状一通にて適ふ

かたじけないと言ひさうな菊人形

晩年を喜び合うて去年今年

鹿鳴くや京菓子にある山の色

風花や大空よりの文かとも

荒海より吹き上げられし秋の鳶

石佛を片手拝みの寒行者

間ひ詰めることに倦みたる林檎むく

落葉掃きつつ存問の刻を得し

本当のことは記さず一葉忌

近くより遠くが騒ぎ枯蓮

煤逃げの父酔客を連れてきし

あれこれと眼鏡とり替へ冬籠

春節の蛇腹に開く色玩具

日向

苑 実 耶

秋風

吉 村 摂 護

入院の廊下に並ぶ聖歌隊

文化の日疑心暗鬼の系図巻く

点滴を連れて歩ける冬日向

秋風の吹き広げたる蚤の市

電柱は地下に潜れり虎落笛

クレーンは黙禱の形冬きざす

沈黙に慣れて二人の日向ぼこ

木枯に曝され赤いポストかな

出る杭のどれにも一羽百合鷗

膝栗毛読み継ぐ夜の長さかな

子は疾うに父の背を越え餅を搗く

献血の短き列や雪催

寒梅や遺影の大島届けられ

冬耕や棚田の下の海と空

猫の子の折り重なれる日向かな

潮木焚く煙の重き十二月

七草爪

中条さゆり

日向ぼこ

樋口みのぶ

烽あげし山より来たる虎落笛

本当の銃音知らぬ稲雀

拝殿は水に浮きたり冬椿

火の山の露けき草を牛が食む

日脚伸ぶ英語で道を問はれけり

母逝きてははの字ふえし日記果つ

休漁の舟に弾むよ初雀

山も田も神々在す事始

人日やいつもの目白来てをりぬ

近づけばわが顔なりし雪女

届出書掲げ川原のどんど焼

ばばさまの頬ほたほたと日向ぼこ

吹くほどに香りの立ちし七日粥

屋根に餌を啜へてゆきぬ寒雀

逢ひに行く七草爪を整へて

立春の筆にのせたる海の色

煤逃げ

矢野百合子

義士祭

大地真理

山裾に舟屋収めて冬深む

帽子の鏝ずらして仰ぐ冬紅葉

松葉蟹みな仰向けに売られをり

義士祭や緩びがちなる琵琶の絃

割られたる薪の匂へる霜の朝

四十七士に寒菊の直立す

冬霧の中より声や登校児

張替へし障子の前にしばし座す

迎へ待つ子の顔餅粉つけしまま

寒風の砲台跡に渦巻けり

裏になり表になりて焚火かな

手を取られ声をかけられ冬暖か

糯藁で縋ふ注連のうすみどり

賑はひし市場のあとのふぐと汁

煤逃げの男混み合ふ波止あたり

昇天

鳳 蛮 華

初夢

高倉恵美子

尻上りして締めくくる祭笛

氏神の旗立ててゐる年用意

木星の香を留むべし蜘蛛の宿

参道の注連縄夫が作りたる

手折るなら白すすきより赤すすき

何もかも人まかせなり年送る

さざんくあの里山絶やすこと勿れ

濡れ縁に雪のつもりし大晦日

落葉踏む軍靴の響き知らぬまま

初夢の友は笑ひて生きてをり

昇天の道筋いくつ冬の晴

だんだんと声の元気に初電話

室の花喪中の電話黙しがち

針糸を通してもらふ三日かな

しろたへの藁を張りけり寒桜

着ぶくれて老いの一昨日けり

狐火

堀江 恵子

胸当てのぴしりぴしりと神迎ふ

手鏡の裏おそろしき水仙花

ちぢれては湖の日差しの葉牡丹に

狐火や湖の真珠の太るころ

手放せし子らと棲む世の手毬唄

焼芋の笛動かざる夜の鹿

農道の平らかにあり冬桜

墓囲うてをりぬ遺愛のモンブラン